

松本ゼミナールⅡ（社会調査ゼミ）活動報告

人間科学部 人間科学科 松本ゼミナール

1 活動について

松本ゼミナールでは、社会調査を体験的に学び、理解を深めるために、現在の地域社会が抱える3つの課題（学童保育など地域における子育て、公園などの公共空間の活用、商店街など地域経済の活性化）のうちから、ゼミ生自身の関心に沿っていずれかを選び、実際に社会調査を行います。とりわけ、ゼミナールⅡでは、地域においてこれらの課題解決に取り組むNPOに参加し、参与観察とインタビュー調査を実施します。

以下では今年度の参与観察に参加したゼミ生の感想や気持ちを紹介します。

2 参与観察調査での感想や気付き

● 初めに参加させていただいた日、すぐに話しかけてくれる子や、抱きつきに来てくれる子がたくさんおり、初対面の大人に対して恐怖心や抵抗が無い、ということを感じた。（上原）

● テレビ台の角に子どもたちが怪我をしないようにコーナークッションがあったりなどさまざまな構造上の配慮があることに気付いた。子どもを守るインテリジェントな工夫にも着目して他の施設も見てみた

いと思った。（小田）

● 自分が友人といつも話しているような雰囲気や話し方では、子どもたちと対等に話すことが困難であった。そのため、話している子どもの気持ちに寄り添って会話することを心掛けると、心を開いて会話ししてくれる子どもが多く見られた。（鈴木）

● 最初の頃は注意の仕方がよく分からなかったが、他の職員の方の注意の仕方などを見て、徐々に上手く注意ができるようになったと思う。子どもの間違っている所を正すのは非常に難しいと感じた。（山崎）

● 子どもたちは私が言った言葉や行動をよく見ていると感じた。その中で私は、大人のどういう行動から子どもたちは影響を受けるか、意外と子どもたちが大人の行動を見ているなと感じる瞬間はあるのだろうかという点に関心を持った。（清野）

● 活動を通して1番楽しさを感じたのは、沢山の人と交流を持つことができたという点です。小さい子どもたちや子育て中のお母さんたちとかかわる機会が普段はほとんど無かったので、子を持つ世帯の生活面での不便さ・大変さなどのリアルな意見を直接聞く貴重な機会となりました。（内山）

● 普段は虫を見るのも嫌いで、おとなしい子だったのが、今回のパークキャラバンに参加したことで、今まで見たことがないほど活発な姿で過ごしていたということを聞いた。それほどに遊ぶということとは子どもにとって重要であると感じた。（吉田）

● ライフラインの乏しい自然公園内でのキャンプにおいて子どもたちの面倒をスタッフが自然に見て、ゲストのご家族の負担が重くならないよう配慮している場面がとて多く見られた。（山田）

● 世界的にプラスチックごみ問題やマイクロプラスチックが話題になっているにも関わらず、プラスチックごみの分別やプラスチックごみを出さないための工夫を行っている人がほとんどおらず、日本人はプラスチックごみに対する興味や関心が低いことが分かった。（佐藤）

● 今回の活動では、コミュニケーションをととても大切に行っていることが観察できた。この活動は、基本ごみ箱の後ろから分別を呼びかけるだけの活動ではあるが、その一場面だけで、分別することの大切さや来場者自身が行うことの意義を伝えなければならなかったため、少ない時間でも伝えたいことを伝える必要があった。（山本）

● ごみ箱にわかりやすいイラストや、ごみの種類ごとにしっかりと場所決めされていることが今回の活動において言葉の壁を超え、耳だけでなく目で理解する工夫なのだと感じる事ができた。(加藤)

● 人の繋がりがどのように生まれるのか。組織の在り方や信頼関係、見知らぬ人同士が同じ空間で生活すること起きること、また子どもと大人のコミュニケーションの在り方の違いについて興味をもった。(岩下)

● 商店街を回ってチラシを配りながら呼びかけを行ったが、チラシを受け取ったり、好意的な反応をしてくれた人たちが大会に出場あるいは観戦する、などといった大会への関心を持たせる効果がどれほどあったか確認したいと考えた。(宮下)

● 商店街の店舗と利用する人を改めて観察した。商店街のどのような店舗が繁栄しているかどのような店舗が衰弱しているかに関心を持つようになった。商店街を利用する人の年齢も観察して、若い方が商店街を利用することが少ない原因にも関心を持つようになった。(沈)